### 日本学士院賞 受賞者

岩が 橋し

勝る



略生 専攻学科目 月 昭和三九年 日本経済史 三月

四三年 四一年 四六年 四四年 三月 一月

四月 四月

六三年 五八年 五三年 八月 四月 四月

同

松山大学大学院経済学研究科長(平成一六年三月まで)

平成

同同同

一二年

二四年

二八年

四月

一二年 元年 ·一〇月 四 四月

> 大阪大学大学院経済学研究科修士課程修了 滋賀大学経済学部経済学科卒業

松山商科大学経済学部助教授 松山商科大学経済学部専任講師 大阪大学経済学部助手

経済学博士(大阪大学) 松山商科大学経済学部教授

松山大学経済学部教授(校名変更による) 米国スタンフォード大学客員研究員(平成元年八月まで)

松山大学地域研究センター長(平成一五年九月まで)

関西大学経済政治研究所非常勤研究員 松山大学名誉教授

(現在に至る)

# 済発展』に対する授賞審査要旨経済学博士岩橋 勝氏の『近世貨幣と経

本書(『近世貨幣と経済発展』名古屋大学出版会、二〇一九年一本書(『近世貨幣と経済発展』名古屋大学出版会、二〇一九年一本書(『近世貨幣との講をで表際されることの多かった徳川時代の貨幣史に、新たな視角と枠組を構築した著作である。貨幣と経済発展の因果関連を直接分析したものではないが、大名領国など、地方における小額貨幣への需要増大と様々な形態の通貨発行との関連に注目し、銭貨だけでの需要増大と様々な形態の通貨発行との関連に注目し、銭貨だけでの需要増大と様々な形態の通貨発行との関連に注目し、銭貨だけではなく藩札・私札も対象とし、地域経済の流通実態を丁寧にみることから、近世貨幣史の流れと経済発展』名古屋大学出版会、二〇一九年一本書(『近世貨幣史の流れと経済発展の態様との対応関係を考察すとから、近世貨幣史の流れと経済発展の態様との対応関係を考察する。

七七二年以降における南鐐二朱銀等の計数銀貨(金貨単位を額面と六年)の意義を貨幣需要に応える政策意図があった点に見出し、一六年)の意義を貨幣品位と量目変更の歴史のなかで、元文改鋳(一七三宗年)の意義を貨幣出位と量音変更の歴史のなかで、元文改鋳(一七三端後の近世貨幣史研究に革新をもたらした研究は、一九七八年刊戦後の近世貨幣史研究に革新をもたらした研究は、一九七八年刊

問題提起となった。
問題提起となった。
「我看の金本位制志向を読みとり、その後の定説とする銀貨)発行に幕府の金本位制志向を読みとり、その後の定説とする銀貨)発行に幕府の金本位制志向を読みとり、その後の定説とする銀貨)発行に幕府の金本位制志向を読みとり、その後の定説とする銀貨)発行に幕府の金本位制志向を読みとり、その後の定説とする銀貨)発行に幕府の金本位制志向を読みとり、その後の定説と

解するかに注力することになったのである。

解するかに注力することになったのである。

解するかに注力することになったのである。

解するかに注力することになったのである。

金および銀に対する銭相場の地域別時系列の整備がなされ、第四章世における経済成長と貨幣の関係を論じた第二章に続き、第三章でからなり、第I部では近世経済の制度的枠組を概観した第一章、近よって可能となった研究の集大成である。序・終章を含み全一五章本書はこの構想のもとに、広範囲の資料と事例を渉猟することに本書はこの構想のもとに、広範囲の資料と事例を渉猟することに

これらの統計整備から、第一に、銭相場については一七七〇年代のとこれでは金銀および銭の貨幣在高(ストック)の再推計が試みられる。いたな

それ以降幕末まで続く構造的銭安が観察され、第二に、硬

東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。東アジアのなかでもっとも高い水準へ押上げたと結論する。

章で論じられるように、松山藩では銀札を発行したが、領内の銭遣け、 はその流通実態であり、札値が一時的に下落したり不安定となったりすることがあっても、一定期間を超えた流通持続があったかどうかである。この観点からの藩札パフォーマンスに私札発行一覧表かかである。この観点からの藩札パフォーマンスに私札発行一覧表からわかることを加えてみれば、藩札を一定期間以上流通させることに成功した事例は一九世紀に入ると増加したこと(たとえば、第七に成功した事例は一九世紀に入ると増加したこと(たとえば、第七に成功した事例は一九世紀に入ると増加したこと(たとえば、第七に成功した事例は一九世紀に入ると増加したこと(たとえば、第七に成功したが、領内の銭遣りすることがある。 はその流通実態であり、私値が一時的に下落したが、領内の銭遣りすることを加えてみれば、藩札を一定期間以上流通させることに成功した事例は一九世紀に入ると増加したこと(たとえば、第七に成功した事例は一九世紀に入ると増加したこと(たとえば、第七に成功したが、第七に対したが、第七に対したが、第七に対したが、第七に対したが、第七に対している。

割を果たした場合も含まれていた(第九章)。 割を果たした場合も含まれていた(第九章)。

り、 済であった大坂市場との結びつきが強かったところで、やはり固定 アスがあるといえようが、 もっとも紙幣の発行は西日本に偏っていたので、この観察にもバイ 固定した銭匁札の場合にその傾向が明瞭であったことがわかる。 の流通量が不十分の地方で機能したらしいこと、それも銀銭比率を 覧表から、銭匁札は、銀建でありながら銀貨不足で、かつ小額貨幣 である。後者は一定枚数の銭貨を一匁と勘定するところの札であ 分析する。一覧表に収録されたのは額面一貫文以上の銭札と銭匁札 幣発行データベースから銭札発行の事例を抽出し、 近世紙幣に関する以上の観察を承け、 銀と銭の関係を直接に知る手がかりと位置づけられる。 東日本であっても弘前藩のように銀建経 第Ⅲ部の第一○章では、 銭遣いの実態を 紙

与した可能性があるとしたことも重要な指摘である。たとえば、 たかをよく示している(第一一章)。それに加えて、西日本におい 銭匁遣いがみられたことは、 日本のなかでは遠隔の地であった土佐 ても相対的に後れたところでは、銭匁遣いが地域の貨幣経済化に寄 三章)では固定銭匁遣いが定着したという。 銭匁札の背後にあった要因が何であっ (第一二章) や九州各地 (第 西

鐐

改訂をしたもので、 は銭貨ストックの新推計であるだけではなく、 組のなかで展開され、 クのデータベースが提供されたと評価できる。 海外流出分の丁寧な再検討と改鋳時における回収分の補訂によって 世紀にわたる貨幣在高の改訂系列(表四-一〇)なのである。それ 以上の要約から明らかなように、本書は銭遣いを中心に据えた枠 しかも、 第一の貢献として挙げられるのは本書の第四章に収められた二 岩橋氏の努力は銭貨以外の問題領域にも向けられ、実 現段階ではもっとも信頼できる近世貨幣ストッ 近世貨幣史に斬新で重要な貢献をおこなっ 金銀貨の既往系列を

札の時期別かつ地域別の発行事例一覧 新たな事例を加え、 タベースである。 覧」(別表一○-一)がそれで、 第二もデータベース構築に関連する。 地域別の銭相場統計の整備 精査・補訂をした、 既往の資料集に依拠しながらも (別表六-一) とともに、今 事例数二○○を超えるデー 第一〇章の「近世銭札発行 (第三章)、および私

後の研究にとって貴重な礎となろう。

整合的な発見事実なのである。 徳川後期の農村中心的経済発展仮説および新保氏以降の研究動向と ことはないであろう。そして、この小額貨幣比率の上昇はたしかに は一八世紀末から一九世紀にかけての時代だったという結論が動く 幣への需要が高まり、その不足感が強く感じられるようになったの もしれない。しかし、たとえそれが可能となったとしても、 ることができれば比率の水準とトレンドには若干の違いが生じたか に示された比率は硬貨だけを対象としていて、札をも含めて計算す させた研究に転換させる上で重要な尺度である。もっとも表二-二 ており、貨幣素材にこだわる従来の貨幣史を需給分析に軸足を移動 第三は分析面における小額貨幣比率の採用である。この比率は南 一朱銀鋳造を嚆矢とする金銀貨の小額面貨幣をも含んで定義され 小額貨

済固有の事情とのなかで理解できることを示したことである。 使われなくなる傾向および金本位制へという大きな流れと各地域経 発行という形態をとった流通実態の多様化とは、銀建取引に銀貨が の章がよく示しているように、 う一つの事実を基本構図に組込み、第Ⅱ、第Ⅲ部における事例研究 第四の貢献は、それにとどまらず、 銭遣いの拡がりと、藩札および私札 紙幣経済への志向という、

このように、岩橋氏は近世貨幣史の基本的な流れを、本書にお

て説得力をもって描き出すことに成功した。いうまでもなく、貨幣で説得力をもって描き出すことに成功した。いうまでもなく、貨幣で、日本学士院賞に値する業績である。とはいえ、これはないものねまた考察の対象とすることが望ましく、その面への言及が本書でみられなかったのは残念である。とはいえ、これはないものねだりというべきであろう。本書が、今後の近世経済発展との関連を探くことのできない視角と知見を提供していることに疑いの余地はなく、日本学士院賞に値する業績である。

### 主要業績

### 著書

- Ⅰ 『貨幣の統合と多様性のダイナミズム』(編著) 晃洋書房、二〇二一年
- 2 『近世貨幣と経済発展』名古屋大学出版会、二〇一九年
- 3 『日本のお金の歴史(江戸時代)』ゆまに書房、二〇一五年
- 究所、二○○二年 電東予社会と住友―その史的特質と共生的関係』(編著) 松山大学総合研
- 5 『近世日本物価史の研究』大原新生社、一九八一年

## 主要論文[単著に収録されたものは一部を除き割愛]

- 五五頁、慶應義塾大学出版会、二〇二〇年1 「近世紙幣の流通基盤」、鎮目雅人編『信用貨幣の生成と展開』、一一九
- 山大学論集』第二○巻二号、一八九−二三三頁、二○○八年2 「近世畿内周辺地域の銭匁遣い―北近畿・宮津藩領を中心として」、『松
- $\,$  'The Institutional Framework of the Tokugawa Economy', in A. Hayami, O.

- Saito and R.P. Toby, eds., Emergence of Economic Society in Japan 1600-1859, pp. 85-104, Oxford University Press, 2004
- 九頁、山川出版社、二〇〇二年 「近世の貨幣・信用」、桜井英治・中西聡編『流通経済史』、四三一-六
- 5 「近世後期南紀における貨幣流通」、『松山大学論集』第一二巻四号、一
- 6 「近世三貨制度の成立と崩壊─銀目空位化への道」、『松山大学論集』第-三八頁、二○○○年
- 一一卷四号、一七一-二〇四頁、一九九九年
- 一○巻二号、三三-六○頁、一九九八年7 「地方の流通実態から見る江戸期貨幣制度の変容」、『松山大学論集』第
- 頁、日本評論社、一九九六年 8 「景気変動と物価」、西川俊作他編『日本経済の二○○年』、五五-七五
- て1、『公山大斧侖集』 帛丘紫三号、二丘丘 七七写、一九七三拝9 「日本の物価変動:一六二〇~一九八四—景気循環の長期波動を求め
- 10 「近代移行期名古屋物価の動き;一八三〇~七九年―京阪物価との比較て」、『松山大学論集』 第五巻三号、二五五-七六頁、一九九三年
- 頁、一九九三年 東、一九九三年 東、一九九三年 東、一九九三年 東、一九九三年 東、一九九三年 東、一九九三年 東、一九九三年
- 集』第四巻三号、三五七 − 八七頁、一九九二年 11 「明治期一地方都市の物価と賃金、一八八〇 − 一九一三」、『松山大学論
- 12 'Agricultural Production and Spatial Variation in Rice Prices within the Greater Nobi in the 1870s: An Analysis of Zenkoku Nosan-hyo', 『松山大学論集』第二巻五号、四九三-五一九頁、一九九〇年
- 九-六六頁、岩波書店、一九八九年13 「地方経済構造の地理学」、新保博・斎藤修編『近代成長の胎動』、二一
- 五-一二八頁、岩波書店、一九八八年4 「徳川経済の制度的枠組」、速水融・宮本又郎編『経済社会の成立』、八
- して」、『松山商大論集』第三九巻二号、三三五-六六頁、一九八八年「広域濃尾地方圏の物価変動、一七五六-一八六七―刈谷物価を中心と

15

- 学経済学』第三五巻四号、二九-五〇頁、一九八六年 「近世銭貨流通の実態―防長における銭匁遣いを中心として」、『大阪大
- 文舘、一九八五年 文舘、一九八五年 でのなかの物価―前工業化社会の物価と経済発展』、一七-四七頁、同日 「江戸前期(一七世紀)の米価動向と経済」、原田敏丸・宮本又郎編『歴
- 五-八二頁、一九八四年18 「播州における銭匁札流通」、近畿大学『商経学叢』第三〇巻特別号、五
- 20 「徳川期米価の地域間格差と市場形成」、社会経済史学会編『新しい江済史学』第四八巻六号、五八五-六〇五頁、一九八三年19 「南部地方の銭貨流通―近世「銭遣い経済圏」論をめぐって」、『社会経

戸時代史像を求めて―その社会経済史的接近』、二二四-二四六頁、東

洋経済新報社、一九七七年